別記様式第３号

学　位　論　文　要　旨

氏　名　山口　美穂

題　目

小学校外国語科「話すこと［やり取り］」領域におけるSmall Talkの指導方法の開発
―児童の発話・英語学習に対する情意と非認知能力に焦点化した検討―

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本論文は，小学校外国語科・外国語活動「話すこと（やり取り）」領域におけるSmall Talkを外国語活動・外国語科の授業で実施し，Small Talkによる児童のコミュニケーション能力の変容を，児童の発話内容を分析することで明らかすること，英語学習に対する情意が，Small Talkにおける児童のコミュニケーション能力の変容に与える影響を明らかにすることにより，効果的なSmall Talkの指導モデル及び教師の介入方法を提案することを目的とする。

第1章では，小学校に外国語教育が導入されてきた経緯を俯瞰し，小学校外国語でコミュニケーション能力の向上が求められていることを整理した。言語活動の1つであるSmall Talkの言語活動が，コミュニケーション能力の向上のために効果的であるという仮説に基づき，第2章から第5章では，コミュニケーション時の児童の観察，発話の実態，アンケート調査による児童の意識調査，非認知能力に焦点を当てて検討した。第6章では，知見に基づいたSmall Talkの指導法を提案し，第7章では全体をまとめた。

まず，Small Talkを実施することの意義を明らかにするために，Small Talkを経験した小学校1年生から中学1年生の児童・生徒の，ALTとの発話パフォーマンスにおける発話内容を分析した。Small Talkの会話活動を継続した児童のALTとの発話パフォーマンステストの発話量の増加が認められたことと，Small Talkを経験していない児童より発話量が多かったことから，Small Talkによる会話の経験が発話量を増やすことに有効であると結論付けられた。FillerやResponseが使えるなど，会話を円滑に繋ぐスキルも習得されるようになっていくことを明らかにした。

次にSmall Talkの指導の効果をより高めるために，児童の発話パフォーマンスと英語学習に対する情意面との相関関係を分析したところ，「緊張しないで話せる」という情意が「発話総語数」「3語以上の文の使用」の変化に関連することがわかった。児童の緊張する理由の記述式回答から，正しく英語を話さなくてはいけないという気持ちや，発話の経験不足から緊張してしまうことが分かる。児童の情意面のアンケートは，「英語学習好感」「情報伝達意欲」「英語必要感」「文字学習重視」の4つの因子に分類された。それぞれの因子と児童の発

話パフォーマンスの相関を調べた結果から，「情報伝達意欲」と「会話中のポーズの割合」の減少の間に相関関係があることが明らかになった。Small Talkでの話題を児童がより伝えたいという意欲がもてるものに工夫していくことの大切さが分かる。

次に，Small Talk 時に児童がどのような会話をしているか明らかにするために，会話音声を経時的に分析した結果，Small Talk を継続すると，会話の中で，「発話語数」「SVO/C の文の数」「ターン数」「反応数」などの増加が認められた。この結果から Small Talk のような即興的な会話の経験を続けることが，自発的な発話量を増やしていくことや会話の質の向上に効果があると考えられる。

児童のコミュニケーション時の緊張感に対する介入方法を開発するために，児童の対人関係の情意面とペアの組み合わせの関係を明らかにした。STAR（School-related Task Assessment & Resolution）の結果より得られた「友人関係の満足度」「周りの仲間の受容」と，アンケート結果より得られた「Small Talk 時の緊張感」をもとに，階層的クラスター分析を実施した。その結果，友人関係の満足度，周りの仲間の受容，Small Talk 時の緊張感が標準化得点で 0 に近い「平均型」，仲間の受容が低い「仲間受容低型」，友人関係の満足度が非常に低い「友人関係満足低型」，Small Talk 時の緊張感が高い「高緊張型」のグループに分けられた。その後，各グループの児童のペアリングによる，発話への影響を分析した。「平均型」の児童と「友人の満足度低型」の児童との組み合わせと，「周りの受容低型」の児童と「友人関係満足度低型」の児童の組み合わせで，「発話総語数」「SVO/C の文の数」「ターン数」の増加が，他の組み合わせと比較して顕著であった。「友人関係の満足度型」の児童や「周りの受容低型」の児童は，Small Talk で友人と会話して英語で自分の情報を楽しく伝え合う中で，徐々に人間関係に対する肯定的な評価が高まるためではないかと考えられる。「高緊張型」児童同士や「友人の満足度低型」の児童と「高緊張型」の児童の組み合わせでは，「ターン数」のみ増加していたことより，長く多くの英語表現を使用せず，会話の主導を早く相手に渡そうとする傾向があると推察される。

さらに，非認知能力と英語学習に対する情意が，Small Talk 時の発話にどのような影響があるか分析した。発話を「発話総語数」「SVO/C の文の数」「ターン数」で数値化し，非認知能力 BIG5「外向性」「協調性」「開放性」「勤勉性」「神経症傾向」と，英語学習に対するアンケート結果から得られた 3 因子「英語学習好感」「仲間の受容」「コミュニケーション不安」との関連を分析した。その結果，「外向性」「協調性」「開放性」が高いことが，「英語学習に対する意欲」を高め、「発話総語数」を増やすことから，円滑なコミュニケーションのために重要であることが明らかになった。「コミュニケーション不安」と発話との関連は認められなかった。「コミュニケーション不安」は「外向性」「開放性」に負の関連があり，「神経症傾向」に正の関連があった。非認知能力は発話に直接影響を与えないが，英語学習に対する情意に影響を及ぼし，情意が発話に影響を与えるという間接効果があることが明らかになった。

研究で得られた知見に基づいて，Small Talk の活動に，介入 1「自己の会話をメタ認知した自己評価」，介入 2「仲間からの肯定的評価」，介入 3「個の特性を把握した意図的なペアリング」の，3 つの実践を提案した。

今後の課題として，Small Talk の実践で変容が起こりにくかった「Small Talk に対する緊張感」「コミュニケーション不安」を感じる児童に対する手立てを追及していく必要がある。ICT の活用により，自己の Small Talk の活動についてメタ認知できるようになったことから，これらの活用に学習意欲の向上効果が期待できる。本論文の限界に対応するため，今後はサンプル数を増やした検証や，長期間の実践による検証を実施する必要がある。